

私たちは上官の命令に従い 蟻のようにただ黙々と戦った

1945年の敗戦後も中国大陆に残留し、中国山西省での国民党軍に参加、
中国共産党との壮絶な死闘を繰り広げていた日本兵がいた。
その後10年近く経ってようやく帰国した彼らを待っていたのは、
日本国家によって見捨てられるという残酷な現実だった。
自らの尊厳を求め、日本国家に対して真実を証明するために
80才の奥村和一是戦後60年目に再び山西省へ。
60年前の証拠を掘り起こしながら、しかしそこで明らかになってきたのは、
自分たち日本兵による中国民衆への凄まじく残虐な行為だった。
日本国家による戦争の「被害者」としてありながら、
一方で残酷な「加害者」としての自分に向きあう奥村をカメラは追い続ける。

今、松本で観て、考える。その意義とは？

映画『蟻の兵隊』は、元日本兵・奥村和一がかつての戦地・中国を再訪し、
国家によって歴史の影に追いやられてきた戦争責任を問い直す記録である。

彼の旅は、単なる事実の検証ではない。

加害者としての過去。自らの中に残る「日本兵」としての自分。

奥村は、自身の戦争に落とし前をつけるべく、山西省の地へと足を踏み入れる。

「戦争」とは過去のものだろうか。

風化しつつある記憶と現代の無関心の空白に本作は切り込んでいく。

かつて全国最多の満蒙開拓団を送り出した地、長野。

松本市が軍都としても機能し、民間人が戦争の一翼を担った

「加害の構造」としての歴史を、現代を生きる私たちは感じているだろうか。

戦争は、被害者にも加害者にも深い爪痕を残した。

語り継ぐ声が消えていく中で、背後にあった「戦争の構造」を見失えば、歴史は繰り返される。

平和の隣に、戦争の構造がむき出しのいまの世界で、

私たちはどのようにこの時代を生きるのか。

この地だからこそ向き合える問いが、ここにある。



＼ 学生有志が主催 /

パネルディスカッション「戦争って本当にあったんだ…」



池谷薫監督・丸山貢一元信毎論説主幹に加え、
高校・大学生といった若者たちがパネラーとなって
映画『蟻の兵隊』、そして戦争について
戦後80年と言われる現在とそこを生きる自分自身について、
会場の参加者も交えて語り合う。



▲ イベント情報
Instagram

戦争って

本当にあつたんだ…

いま、映画

『アリ 蟻の兵隊』

を観る

7.26.Sat

信毎メディアガーデン 1F ホール

第1回上映 11:00 ~ 12:41

第2回上映 14:00 ~ 15:41

パネルディスカッション 16:00 ~ 17:30 (参加自由・無料)

チケット

一般: 1500 円

学生: 500 円

※学生…中高浪大専の生徒・学生

申込



△ Web ショップ

信毎メディアガーデン
1 階受付
(9:00 ~ 18:30)

